

欧州人民党とフィデス

——ハンガリー権威主義政党的処分と脱退——

山 本 直

はじめに

二〇一〇年にオルバン・ビクトルが首相に返り咲いて以降、彼が率いる政党フィデスはハンガリーにおいて高い支持を保ち続けていた。そのような中、競争的な国内選挙は実施されるものの、司法機関の独立性は低下し、野党、メディアおよび非政府組織の活動は制限され、学問の自由は脅かされ、政府関係者の汚職は進んだ。二〇二〇年に公表した報告において、フリーダムハウスはハンガリーが「中・東欧の民主主義諸国群からの初めての離脱国」になったと認定した。⁽¹⁾ V—DEMインスティテュートは同年に、「EUで唯一の権威主義国」という烙印をついに押すことに

なつた。⁽²⁾

そのハンガリーが加盟するEUは、法の支配と民主主義、あるいは人権尊重を自らの価値とする手前、フィデスに對して処罰的な措置を取るべき立場にあつた。けれどもEU機関は、実質的な対応をほとんどしてこなかつたといつてよい。たしかに欧州委員会は、EUの基本条約が導入する義務不履行手続きを幾度か適用しつつ、独自に設けた法の支配枠組みも運用した。欧州議會は、EUの価値に違反する危険が同国にあることを確認するように理事会に迫つた。その理事会も、違反の危険を確認するには至つていないものの、EU条約の規定に基づいてハンガリー政府から事情を聴取した。しかしながら、これらの試みは概して迅速さに欠くばかりか、さほど有効でもなかつた。⁽³⁾

以上の経緯から通常問われるのは、EU機関が当該分野で不十分な権限しか享受できていない現状である。たしかに、EU機関の権限が十分でない状況下では、それだけ特定の加盟国における変化を抑制することは難しいであろう。もつとも、EUによる対応の停滞をより動態的に把握するには、EUの権限以外の政治的側面に着眼する必要がある。フィデスは二〇〇四年以降、欧州人民党という中道右派の政治団体に所属していた。同党は欧州最大の勢力であつたがゆえに、EU機関でも強い影響力を保持する。その欧州人民党がフィデスに決然と対応できなかったことが、EUのハンガリーへの対応の停滞の一因になつたとも考えられるのである。

この点を明らかにするために、本稿では、二〇一九年から二〇二一年初頭までの欧州人民党とフィデスの關係に注目する。⁽⁴⁾二〇一九年三月には、欧州人民党がフィデスに権利停止処分を科している。その後二年を経た二〇二一年三月に、フィデスは同党から脱退する旨表明した。この期間に見られた動向が、欧州人民党とフィデスの關係性を象徴しているように思われる。

以下では、まず、欧州人民党がフィデスに科した権利停止処分の概容と含意を論じる(一)。次いで、同党がフィデスの除名に踏み切らなかった要因を考察する(二)。その上で、処分を受けたフィデスが二年もの間残留した理由を推測し(三)、最後に、処分をめぐる欧州人民党の混迷状況を概観するものとする(四)。

一・欧州人民党の権利停止処分 ― 概容と含意 ―

欧州人民党の政治総会は、党役員の他、党所属の欧州議会議員や加入政党党首からなる事実上の党最高決定機関である。その政治総会が、二〇一九年三月二〇日にブリュッセルで開いた会合において、フィデスに次の処分を下すことを決定した。賛成一九〇票、反対三票という大差での決定であった。

(一) 処分の概容

党の公式サイトによると、処分は次のようなものであった。⁽⁵⁾

「一・フィデスは、我が党の筆頭候補者であるマンフレート・ベーバーが示した基本的な条件を満たすこと。以下がその条件である。

― ジャン・クロード・ユンケル欧州委員会委員長を対象とするフェイクニュース運動に用いたポスター等を即時撤去する必要がある、

― このような運動が多大な政治的損害を被ることを理解する必要がある。我が党は、フィデスがこうした攻撃的な行動を今後慎むことを要求する、

―表現、科学および教育の自由は、我々にとって根本的に大切である。したがって、中央ヨーロッパ大学をめぐる法的な問題を明白にする必要がある。

二・党役員会とフィデスは、評価委員会の報告がなされるまでフィデスの加入資格が停止されることに共同で合意する。フィデスは、加入政党に付与されるあらゆる権利、我が党のすべての会議で票を投じる権利、ならびに役職に候補者を推薦する権利を今やもたない。我が党のすべての会議への出席を認めない。以上の決定は即時に効力をもつ。この手続きは前例に基づくものである。

三・我々は、右記の基本条件が満たされたのか監視することを任務とする評価委員会を設置する。ヘルマン・ファンロンパイが委員長に就き、ハンスゲルト・ペテリンクとボルフガンク・シュツセルによつてそれは構成される。前述の三つの条件に加えて、法の支配と我が党の価値が尊重されているか、ならびに、我が党の緊急決議『EUの価値の保護と民主主義の擁護』が実行されているか徹底的に評価されることになる、

四・評価委員会は、近日中に党役員会に報告を行う。この委員会は完全に独立して活動する。この委員会が最終報告を行うまでフィデスは残留する。」

フィデスに下した主な処分は、右記二にある通り、欧州人民党に加入する資格を無期限で停止するものであった。具体的には、「加入政党に付与されるあらゆる権利、我が党のすべての会議で票を投じる権利、ならびに役職に候補者を推薦する権利」を剥奪した。それに加えて、党のすべての会議に出席することも禁じた。

同党の規程によると、政治総会は処分の理由を公表する義務を負わない。^⑦二〇一九年三月二〇日の処分でも、理由は必ずしも明かされなかった。それでも、右記一からこれを推測することはできる。党の功労者といえるウンケル欧

州委員会委員長をフェイクニュース運動を織り交ぜつつ批判したこと、そのような運動が同党に多大な政治的損害を与えたこと、ならびに表現、科学および教育の自由を侵害したことが直接的な理由であったと推測できるのである。フィデスに対しては、ハンガリー国内の司法機関やメディアの独立性を低下させたという批判が二〇一一年頃からあった。その後、シリアやイラクからの難民を保護しようとする国内NGOをフィデスは抑圧した。抑圧の過程では、そうしたNGOの活動を財政支援する同国出身の資産家ジョージ・ソロスをユダヤ人嫌悪を仄めかしつつ敵視した。同じく、ソロスが出資するブダペストの名門私大・中央ヨーロッパ大学を難癖をつけて国外移転に追い込みつつあった。このようなフィデスの施政が、先に触れた表現、科学および教育の自由を侵害しているとみなされた。そして、フィデス批判の決定となったのが、ウンケルを標的とするフェイクニュース運動であった。⁽⁸⁾

処分を掲示した党の公式サイトでは、前書きで次のように付記された。我が党は、「人の尊厳、信教の自由、表現と結社の自由、民主主義、平等、法の支配および少数者に属する人達の権利を含む人権の尊重」という価値を重んじるEUに、党として賛同しているのである、と。⁽⁹⁾ このような党の姿勢を再認しつつ、政治総会は、EUと欧州人民党の双方が重んじる価値をフィデスが侵害したと判断した。

(二) 処分の含意

欧州人民党の二〇一九年三月二〇日処分について少し補足しておきたい。

右記一で言及される筆頭候補者は、五年毎に実施される欧州議会の直接普通選挙に向けて、欧州規模の政治団体等が各々に独自の次期欧州委員会委員長候補者を指名するものである。当時の欧州人民党は、二〇一九年五月に実施さ

表 欧州人民党の役員会名簿（2020 年 10 月現在）

	氏名	加入政党（カッコ内は国名）	現職・前職等
党首	ドナルド・トゥスク	市民プラットフォーム（ポーランド）	元ポーランド首相、元欧州理事会常任議長
欧州委員会委員長	ウルズラ・フォンデアライエン	キリスト教民主同盟（ドイツ）	元ドイツ防衛相、元ドイツ労働・社会相
欧州理事会常任議長	—	—	—
外務・安全保障上級代表	—	—	—
欧州議会議長	—	—	—
欧州議会会派代表	マンフレート・ペーパー	キリスト教社会同盟（ドイツ）	元欧州委員会委員長筆頭候補者
名誉党首	—	—	—
副党首（10 名）	マリヤ・ガブリエル	欧州発展のためのブルガリア市民	欧州委員会委員（革新・教育担当）
	デイビッド・マカリスト	キリスト教民主同盟（ドイツ）	欧州議会外務委員会委員長
	ヘレン・マッケンティ	統一アイルランド党	アイルランド司法相
	ヨハネス・ハーン	国民党（オーストリア）	欧州委員会委員（予算担当）
	エステル・デランゲ	キリスト教民主アピール（オランダ）	欧州議会議員
	アントニオ・タヤーニ	フォルツァ・イタリア	元欧州議会議長、元欧州委員会委員
	ジークフリート・ムレシャン	国民自由党（ルーマニア）	欧州議会議員
	フランク・ブルースト	共和党（フランス）	元欧州議会議員
	パウロ・ランゲル	社会民主党（ポルトガル）	欧州議会会派副代表
	ペッテリ・オルボ	国民連合党（フィンランド）	元フィンランド副首相
財務部長	クリスティアン・シュミット	キリスト教社会同盟（ドイツ）	元ドイツ運輸・デジタル相
事務長	アントニオ・ロペス・イストゥリズ	国民党（スペイン）	欧州議会議員

出典：STATUTES OF THE EUROPEAN PEOPLE'S PARTY, Article11,

欧州人民党ホームページ <https://www.eppgroup.eu/about-us/presidency>（2020 年 11 月 6 日閲覧）に基づき作成。

れる第九回欧州議会選挙を二か月後に控えていた。同党は、欧州議会の自党会派を統率していたドイツ人のペーパーを、自党の筆頭候補者として前年に指名済みであった。そのペーパーが示した諸条件をフィデスに満たさせるという形式での処分であった。

右記二および四に言及される党役員会は、三年任期で選出される欧州人民党党首のほか、EU 四機関の長（欧州委員会委員長、欧州理事会常任議長、外務・安全保障担当上級代表および欧州議会議長）に任ぜられる党員、欧州議会における党会派の代表、名誉党首、副党首一〇名、財務部長および事務長からなる（二〇二〇年一〇月時点の役員会名簿について表参照のこと）。その役員会への報告を任されたのが、臨時に設置された評価委員会である。評価委員会が党内のベテラン三名によって構成されるのは、党としての一体性ならびに報告の正当性を慮つてのことであろう。本処分の際しでは、ベルギー首相と欧州理事会の常任議長を歴任したベルギーのファンロンパイを委員長とし、ドイツ人で欧州議

三元議長のペテリンクならびにオーストリア前首相のシュツセルが委員会を構成するものとした。

以上のように、処分からは、筆頭候補者の条件設定や脱国境的な組織としての党の多元性といった特徴を看取できる。ともあれ、本稿の目的に照らして留意するべきは、フィデスを党から除名するのではなく、これを残留させたうえで加入政党としての権利を停止するに留めたことである。

フィデスのハンガリー施政を鑑みて、党では除名を望む声が少なからずあった。ドイツのラジオ局のインタビューにおいてユンケルは、フィデスは根拠なき批判を行ったと吐露しつつ、フィデスを除名するように進言したと明かしている。^⑩ 党に加入する国内政党の次元でも動きがあった。二〇一九年三月二〇日の政治総会に先立ち、一三の加入政党が除名処分を検討するようジョゼフ・ドール欧州人民党党首に申し入れていた。これら一三政党の中には、フィデスがハンガリー政権与党に返り咲いて間もない当時からフィデスに批判的なものも含まれた。此度は、フィンランドの国民連合党の音頭の下に一三の政党が集まった。^⑪ 同党以外ではベルギー、ギリシャ、スウェーデン、ルクセンブルク、ポルトガルおよびアイルランドの政党が含まれると報道された。^⑫ 欧州人民党の規程によると、除名を提案できるのは党役員会か、もしくは異なる五カ国で活動する七つの加入政党である。^⑬ 後者の要件を満たす中での申し入れであった。

しかし二〇一九年三月二〇日の政治総会は、フィデスを除名させるには至らなかったのである。しかも、右記二の最初の一文は、「党役員会とフィデスは（…）加入資格が停止されることに共同で合意する」となっている。つまり処分は、加入政党の脱退、資格停止および除名を定める党規程に基づくものではなかった。党役員会とフィデスが資格停止に共同で合意するという、フィデスの体面に配慮した文面であった。

政治総会は、EU機関や各種団体のオフィスが集積するブリュッセルで開かれた。会場となった欧州議会のビルが、冷戦終結時のハンガリーで初めて民主的に選出された首相の名を冠していたことはいささか皮肉めいていた。総勢二六〇名ほどからなる政治総会では、¹⁴当該議題について三時間ほど議論が続いたという。すでに紹介した処分の提案には、フォルツァ・イタリアやスロベニア民主党等、一部の出席者が最後まで反対した。けれども、先に触れたように、他の大多数の出席者が賛成票を投じたことにより提案は採択された。¹⁵

二・フィデス除名への欧州人民党の躊躇

（一）躊躇の要因

欧州人民党の政治総会が除名に踏み切らなかったのは、除名を求める声が党内でそれほど高じなかったからである。先に触れたように、フィデスの除名を求めた同党の加入政党は十三を数えた。その中には、フィンランドの国民連合党の他、ルクセンブルクのキリスト教社会人民党やオランダのキリスト教民主アピール党等、欧州人民党内部で一定の影響をもつものもあった。西欧および北欧の諸国のみならず、南欧ギリシャの新民主主義党といった政党も名を連ねたのである。このような動きが、政治総会の議論にインパクトを与えたことは想像できる。けれども、欧州人民党に正加入する政党だけでもEU二七か国から五〇近くを数える。¹⁶五〇の内の一三という割合は、必ずしも高くはない。しかも、欧州人民党内部で強い発言力をもつドイツのキリスト教民主・社会同盟、フランスの共和党（国民運動連合）およびスペイン国民党が一三か国に加わらなかった。そうした状況でフィデスを除名することは難しいだろう。

除名を求める声が高じなかった要因は、三つほど考えられる。第一に、フィデスの除名によってEUにおける党の勢力が縮小することへの虞があった。フィデスは当時、欧州議会に一二名の議員を送り込んでいた。加入政党の中で六番目に多いフィデスを失えば、⁽¹⁷⁾それだけ欧州議会での党の発言力が弱まる。同様の虞は、フィデスが代表する他のEU機関においても当てはまるものであった。

欧州において欧州人民党の勢いは、一九九〇年代半ばからしばし高止まりの状態にあった。二〇〇四年に中・東欧諸国がEUに加盟した折りには、これら諸国から多くの国内政党と新たに選出された欧州議会議員を華々しく迎え入れもした。そのような高止まりと高揚の時代が続いただけに、二〇〇〇年代後半以降の党勢はなおさら衰えを感じるものとなった。問題は、EUにおける党勢の縮小だけではない。ポーランドの法と正義やイタリアの同盟のように、欧州人民党、欧州社会党および欧州自由民主連合等の親EU連合に対抗する勢力が伸長していた。フィデスを除名すれば、こうした勢力と合流して自党に牙をむくシナリオもありえた。そうになると、通貨・財政政策や難民政策で揺らぐEUがさらに不安定な運営の下に置かれてしまう。このような状態を避けるために、権利停止の処分で結着が図られたのである。⁽¹⁸⁾

西欧および北欧に位置する加盟国の有力政党が、中・東欧諸国に進出する産業界に配慮している。このような構図がフィデスを除名しない第二の要因として挙げられる。西欧や北欧に本社をおく多国籍企業は、オルバンが政権に返り咲いた二〇一〇年以降もハンガリーへの投資を増加させていた。とりわけドイツの自動車メーカーは、二〇一〇年代後半期になっても投資熱を保っている。二〇一九年にはBMWグループが、同国東部のデブレツェンで工場を整備する計画を発表した。さらには、二〇二〇年のコロナウイルス禍にあつても、メルセデス社が同国中央部のケチケ

メートで電気自動車の生産を構想していた。¹⁹⁾

民族主義的な施政を展開しつつ外国資本を呼び込むのは、良くも悪くもオルバンの才覚なのであろう。他方でとりわけ苦しい立場にあるのが、ドイツのキリスト教民主同盟ならびにキリスト教社会同盟である。ドイツにおける企業献金とロビイングの実態は必ずしも明らかではない。²⁰⁾とはいえ、ドイツとハンガリーの歴史的な関係も相まって、²¹⁾両党がオルバンへの懲罰的な措置に容易に賛同するとは思えないのである。

このような状況を想起すれば、加入資格の停止で結着するよう促したのが両党の関係者であったことも納得がいく。アンゲラ・メルケルからキリスト教民主同盟の党首職を譲り受けたアンネグレト・クランプカレンバウアーは、「オルバンの信用が回復しない限り、通常の加入資格が与えられることはありえない」とメディアに応えた。²²⁾キリスト教社会同盟に所属する前出のベーパーは、「(処分によって) フィデスは、欧州人民党の今後の政治方針について発言権を失うことになる」と述べた。²³⁾いずれのコメントも耳触りはよいが、見方によれば除名に向けたけん制ともとれる。

第三の要因として考えられるのは、欧州人民党のドール党首が党の家族的な雰囲気而努力して強調したことである。そのような雰囲気重んじられる組織は、結束しやすいであろうし、メンバーも誇りをもって活動に関われよう。けれども反面、家庭的な雰囲気は馴れ合いを生みやすくなる。

そうした馴れ合いが、党としてフィデスに対応する際に表れた。二〇一五年から翌年にかけてフィデスが実施したハンガリーの難民政策は、あまりに排外的であるとして同国の内外から批判された。その中であつてドールは、「(オルバンは) 欧州人民党一家の異端児ではあるが、私は彼を気に入っている。我々は常に解決策を見いだせる」と弁明

した。⁽²⁴⁾ フィデスへの風当たりがさらに強まった二〇一八年の時点においてさえ、ドールは「オルバンは異端児ではあるが（…）我が家族の一員なのだ」と繰り返した。⁽²⁵⁾

ハンガリー問題の脈絡でドールが「欧州人民党一家」や「我が家族」の表現を用いた意図はよく分からない。元来党全体の調整を得意とするタイプであるのか、他国の政治体制に拘泥しない信条をもつのか、あるいは党内の側近であるアントニオ・タヤーニらから助言があつたのかは憶測するほかない。⁽²⁶⁾ ともあれ党首である彼の意向は、多くの党関係者によつて斟酌されよう。政治総会が除名処分に踏み込めなかつた背景には、このようにドールの影響もあつたものと推察できる。

(二) 欧州議会会派におけるフィデスの処遇

欧州人民党の党内で見られた躊躇は、欧州議会における同党会派の運営においても見受けられた。

フィデスに所属する欧州議会議員は、たしかに会派および欧州議会のいずれの役職にも推薦されなくなった。しかし彼らは、会派の会合には従来通りに出席した。うち一名は、処分前から務めていた会派副代表の任期を辞職せず⁽²⁷⁾ 全うもした。⁽²⁷⁾ このような状況について、別の副代表であるスペイン選出のエステバン・ゴンザレス・ポンス議員は、フィデス所属議員への会派の対応について党から指示がないとメディアに回答した。指示がないゆえに、会派として⁽²⁸⁾ は取り立てて措置をとつていないとしたのである。そのような目こぼしは、オルバンに近いハンガリー人の欧州委員⁽²⁹⁾ 会人事の際にも見られた。すなわち、EU常駐代表のバールヘイ・オリベルがフォンデアライエン新委員会の近隣・拡大政策担当委員に任命されたことを、会派のスポークスパーソンが公式サイトでわざわざ祝福している。

欧州人民党の欧州議会会派が同党と密接な関係にあることは疑いがない。党の規程は、欧州議会においてはその会派が党を代表すると明記する。⁽³⁰⁾ 会派の代表が、同党党首や欧州委員会委員長らとともに党役員会に名を連ねることも規程で決まっている。⁽³¹⁾ けれども、そうした中であつてさえ同党の会派は、同党からの一定の自律性を享受する。EUの政策形成に自会派の利益を反映させようとする行動は、欧州議会内の他の会派との協力や妥協を図る行動とともに個別具体的である。そのような会派の行動様式は、汎欧州的な団結に重きをおく欧州人民党のそれと常に整合するわけではないだろう。⁽³²⁾ こうした点を考慮すれば、会派によるフィデスの目こぼしがあつても不思議ではない。けれども、このような目こぼし自体が、フィデスに毅然と向き合えない党の状況を反映してもいた。

三．フィデスによる欧州人民党への残留

これまで欧州人民党がフィデスの加入資格を停止した経緯や要因を見てきた。本節ではオルバンとフィデスの立場から二〇一九年三月二〇日の処分に接近したい。

（一）選択肢としての残留

加入資格が停止されたフィデスには、欧州人民党から脱退するという選択肢があつた。フィデスに親和する思考と行動様式をもつ政党は、欧州人民党のむしろ外部にあるように見えた。二〇一五年以降ポーランド与党に返り咲いていた法と正義は、フィデスと似た施政を展開して批判を浴びていた。イタリアの同盟やオーストリアの自由党等とも、フィデスは密接な協力関係を模索できたであろう。欧州人民党から脱退してこれらの政党と合流すれば、同党内部の

諍いで消耗することを避けつつ、EUの政策決定に一定の影響を及ぼすことも可能であった。

しかしオルバンは、容易にはフィデスを脱退させなかった。政治総会による処分から二か月を経て実施された欧州議会選挙では、フィデスは、ハンガリーにおいて引き続き安定した国内支持を得た。³³ このように国家次元で好調を保ちながらも、オルバンは欧州人民党評価委員会の判断に委ねる姿勢を示し続けた。

(二) キリスト教民主主義への愛執…相思相愛から共存へ

オルバンが容易にフィデスを脱退させなかったのは、そうすべき差し迫った理由がなかったからである。その光景は、次のように説明できる。すなわち、法と正義や同盟と組んでまで成し遂げたい目的を、オルバンはEUにおいて有していなかったという説明である。EUの将来像や実施されるべき共通政策を意見するのであれば、これらの政党と組むよりはビシェグラード四か国という中・東欧の枠組みを用いる方が有効であろう。

しかしフィデスを残留させた理由を、このような合理性にのみ求めることには釈然としない。というのもオルバンは、キリスト教民主主義の理念を体現しようとする欧州人民党に愛執ともいえる感情を抱いていたように思われるからである。

欧州人民党に抱くオルバンの感情は、西欧を拠点とするメディアとのインタビューから読み取れる。そのようなメディアとしてここでは無作為に四紙を取り上げ、これらへのオルバンの回答を以下に引用したい。丸カッコ内は、インタビューの掲載紙とその公刊日である。

「(…) 私が政治家として歩み始めた三〇年前には、キリスト教民主主義、社会民主主義および自由主義がしのぎを

削っていた。その後優勢になった自由主義であるが、彼らは選挙で負ける度に民主主義の終焉を口にするようになった。社会民主主義が衰退する中、自由主義の思考から自らを守らなければ、キリスト教民主主義も滅びてしまう。（…）フィデスを欧州人民党に招き入れてくれたのは、深く敬愛するヘルムート・コールであった。欧州人民党を強固にすることが我々の目的である。党内の左派は適当な理由をつけてハンガリーを攻撃するが、本当は党を弱めたいのである。我々が脱退すれば、次はイタリアに、そしてオーストリアに彼らは狙いを定める。」（独ベルト・アム・ゾンターク紙、二〇一九年三月二日）³⁴

「（…）欧州人民党は自滅に向けて準備している。同党は左派とともに凋落したのである。実際、同党に所属する加盟国首脳の数も減っており、今後も減り続けるであろう。（…同党は）左派と協働しないのであれば、ヨーロッパの右派との協力を模索するしかない。マッテオ・サルビーニと連携すれば強力になる。欧州人民党に加入するシルビオ・ベルルスコーニのフォルツァ・イタリアが連携の鍵を握る。（…）西欧と中欧は違いすぎる。西欧の人々が他者の権利と多文化主義を重視することに、私は異を唱えない。ただし、ハンガリーが西欧に付き従わないことは受け入れていただきたい。我が国は、民族を団結させる力としてのキリスト教に基づいて運営されている。キリスト教に基づく民主主義という点で、我が国は自由主義を信奉しない。」（南ドイツ新聞、二〇一九年五月一日）³⁵

「（…欧州人民党を脱退して）民族主義の諸政党に合流する可能性はある。しかしそうなることを私は望まない。欧州とりわけドイツのキリスト教民主主義勢力は左傾化した。左傾化が続けば、キリスト教民主主義勢力は左派や社会主義勢力との連携を保たざるをえなくなり、それらに妥協せざるをえなくなり、ひいては自らのアイデンティティと価値を失うことになる。（各国の）キリスト教民主主義政党がこのような状況にある中で、我が党を含む周辺部の政党に

大いなる機会がある。これらの政党は、自らをキリスト教民主主義と名乗ることはないが、キリスト教的な価値を体現している。」(オーストリアのクライネ・ツァイトンク紙、二〇一九年五月五日)⁽³⁶⁾

「(…) 一二の国内政党が欧州議会選挙の直前に除名を求めたことは、これまでの人生の中で最も馬鹿々々しい出来事であった。欧州人民党の指導者らは、これを拒絶できないほど弱くなっていた。(…党の筆頭候補者である) ベーバーは礼儀をわきまえているが、自身の信念のために闘う意志をもたない。彼は適応しようとする。現時点で、彼が欧州社会党のフランス・チーママンズとどう違うのか、外見を除いて分からなくなった。彼はもう保守政治家ではない。(…) 欧州人民党がまだ政治的な故郷かと問われれば、答えは是である。イタリアのサルビーニらと新たな連携を築くかは、欧州人民党次第である。同党が成功するためであれば、私は労を惜しまない。欧州人民党は左派と結びついてほしくない。欧州の左派は移民流入を止めたがらず、その管理もしたがない。」(独ビルト紙、二〇一九年五月二七日)⁽³⁷⁾

以上のオルバンの回答からいくつかの興味深い点を抽出できようが、ここではオルバンの思考を反映する言説があることを指摘する。それは、キリスト教民主主義の信奉者としてのオルバンが、欧州人民党で同居する左派および自由主義の勢力との闘いを意識していたことである。オルバンは、左派や自由主義は誤ったイデオロギーであるとは述べていない。たとえば、前出のクライネ・ツァイトンク紙において彼は、オーストリア・ハンガリー帝国の勃興期、ならびに冷戦終結期に立ち現れた自由主義を肯定的に評価する。⁽³⁸⁾ オルバンにとって問題は、自由主義が冷戦終結時から変質し、欧州人民党内部のキリスト教民主主義勢力を掘り崩したことである。⁽³⁹⁾ ファイデスは、この状況を阻止するべく同党に残留する使命を負うとする。

このような回答は、残留したいことを正当化するための方便にすぎないという勘考もありえよう。けれどもオルバンは、欧州人民党やキリスト教民主主義について抱く感情を繰り返し明かしている。また、彼は欧州理事会において、ハンガリー政府で閣僚を務める同志は理事会において、あるいはフィデスから出馬した欧州議会議員は欧州議会において、それぞれ欧州人民党およびその会派の方針と党議に常々従ってきた。カレンバウアーは、二〇一九年五月の欧州議会選挙を控える会見で、次のように語っている。「（フィデスが）欧州人民党から一度脱退すれば、二度と党には戻れまい」⁽⁴⁰⁾。このような言葉が口を衝いてでたのも、カレンバウアーが党に対するオルバンの特別の感情を察知していたからであろう。

フィデスは欧州人民党から脱退せず、欧州人民党もフィデスの除名に躊躇する。このような状態は、互いに互いを必要とする相思相愛を超えて、もはや共依存（codependency）の磁界に達しているかのようであった。共依存は、心理面における過剰な相互依存状態を指す概念として知られる⁽⁴¹⁾。そのような関係性と似たものが、フィデスと欧州人民党という二つの組織の間に成立していたように見えた。

四・欧州人民党とEUの混迷

（一）ハンガリー問題の閉塞

第九期欧州議会の初招集からフォンデアライエン欧州委員会の発足へと続いた二〇一九年後半は、EUとして新たなスタートを刻んだ時期であった。けれども、EUによるハンガリーへの対応が活性化する材料は見つからなかった。たしかにEU機関は静観していただけない。欧州委員会の委員選考においては、欧州議会の法律委員会が、

フィデスによって推挙されたハンガリー元司法相を反対多数で任命不可とした。それは、金銭的な利害相反を問題視した結果であるが、イギリスのガーディアン紙は元司法相を次のように評価した。「(元司法相は)自身が一員になるかもしれない欧州委員会との摩擦をこれまで生んできた張本人である。彼こそが、難民支援に従事する非政府組織を処罰できる立法を進め、亡命申請者を劣悪な環境下に収容し、中央ヨーロッパ大学をブダペストから強制的に退去させる措置を統括した」。⁽⁴³⁾「彼を推挙したフィデスは」我々を挑発した」と同紙でコメントした欧州議会議員までいたものの、⁽⁴⁴⁾フィデスが推挙した別の人物——前出のバールヘイである——が結局は委員に就任している。

理事会でも動きがあった。二〇一九年下半年に理事会議長国を務めたフィンランドが、同年九月一六日および二月一〇日の二度にわたりハンガリー政府から聴取する機会を設けたのである。それは、EU条約第七条に基づく公式の機会であったために、フィデスも応じざるをえなかった。新たにハンガリー司法相に就いたバルガ・ユディトをはじめ数名のハンガリー代表団が、一〇カ国ほどの加盟国代表および欧州委員会代表から、司法の独立性、汚職対策、メディアの独立性、学問と表現の自由、移民・亡命申請者・難民、行政裁判所の改変等広範な事案について聴取された。⁽⁴⁵⁾けれども、聴取が不満だったのだろうか、バルガが「政治的な魔女狩りだ」と聴取を難じたと報じられた。⁽⁴⁶⁾彼女と同席したハンガリー国務長官のコバチ・ゾルタンは、聴取中にツイッターを更新し続けたことをたしなめられた。ツイートのひとつは、自国出身の富豪ジョージ・ソロスと欧州委員会のベラ・ヨウロバ副委員長の写真を、「これがソロス・オーケストラのやり方である」という文章を付して投稿したものであった。⁽⁴⁷⁾フィンランドの下理事会が聴取を行ったことはEUにおいて進展であったが、解決の糸口を見いだすには程遠い状況であった。

（二）評価委員会の機能麻痺

翌二〇二〇年を迎えても、欧州人民党はフィデスとの関係を「清算」することができなかった。それゆえであろうか、同年において双方の関係はさらに混迷した。

欧州議会は、同年一月一六日に採択した決議において、理事会が聴取したにもかかわらず改善が見られないことを遺憾であるとした。⁽⁴⁸⁾ ハンガリーとポーランドを名指ししたこの決議について、オルバンは自国のラジオ放送で「（欧州人民党という）家族の多数が裏切ったがゆえに」採択されたと述べた。その上で、「フィデスは脱退する寸前であった」、「欧州人民党がハンガリーを擁護しないのであれば、（脱退して）新たな欧州キリスト教民主主義運動を始める必要が出てこよう」等と続けた。⁽⁴⁹⁾ 欧州人民党に対してオルバンは、強気の姿勢を依然として取り続けた。

そのようなオルバンとフィデスの姿勢は、やがて始まるCOVID－一九の感染拡大の中でも保たれた。フィデスが三分の二を占めるハンガリー議会は三月、感染対策のための法制化を進めた。制定された対策法が政府に過度の権力を与えるという批判を、オルバンが意に介した様子はなかった。⁽⁵⁰⁾ 二〇一九年三月二〇日処分をもって組織された欧州人民党評価委員会の脈絡でも同様の姿勢を観察できる。二〇二〇年一月にフィデスの資格停止を継続するよう具申した評価委員会であったが、⁽⁵¹⁾ 五月下旬には、同委員会のシュツセル委員が委員会の活動が麻痺していることを自国オーストリアでのインタビューで明かした。加えてシュツセルは、麻痺した責任がドナルド・トウスク欧州人民党党首にあると仄めかしたのである。⁽⁵²⁾ 隣国人であるオルバンと個人的な親交があるシュツセルは、フィデスを除名することに消極的であったとされる。⁽⁵³⁾ 彼は、除名を検討することにファンロンバイ委員長が前向きであることを案じ、昨秋から党首に就いていたトウスクを糾弾することで怪しい雲行きを追い払おうとしたのであろう。⁽⁵⁴⁾ 六月九日にファンロ

ンパイは、活動が麻痺した原因はトゥスクでなく、委員会内で共通のアプローチを取れなかったためであると党の公式ツイッター上で釈明した。⁽⁵⁵⁾けれどもその前後において、フィデス上層部がトゥスクへの容赦なき攻撃を仕掛けるのである。すなわち、欧州議会においてフィデス所属議員を束ねるドイッチ・タマーシユは、「(トゥスクは)オルバン嫌悪症を患い、(ポーランドの)カチンスキに対して政治的な聖戦を遂行し、またあらゆる力をもつてハンガリー首相を非難している」、「遺憾ではあるが、欧州人民党の運営よりもポーランド国内でのご自身の政治的闘いに躍起になられている」と皮肉を込めつつ批判した。⁽⁵⁶⁾

自由主義的と目されるトゥスクの信条は、非自由主義を掲げるフィデスの主張とそもそも調和しがたい。加えてトゥスクは、フィデスが連携するポーランドの政権与党法と正義と国内で競う野党第一党の中心メンバーであった。こうした背景から、ドイッチはトゥスクを批判する十分な動機を有していた。批判したのはドイッチだけではない。ハンガリー政府で家族相を務めるフィデス副党首のノバク・カタリンは、次のようにツイートした。「トゥスクはツイートを連投したりインタビュウを受けたりはするが、公的なメッセージを送ったためしがない。欧州人民党を団結させる指導者が必要な昨今にもかかわらず、党内でカオスと混乱が生じている」。⁽⁵⁷⁾二〇一五年の欧州難民危機に際してユンケル欧州委員会委員長に取ったように、特定の党関係者を一齐に非難するフィデスの方法はもはや常套化していた。ユンケルに次いで標的にしたのがトゥスクであった。

ノバクはさらに、以下のツイートを残している。「欧州人民党が自由主義的で左翼的な方角を向き始めたがために、フィデスは同党の加入資格を停止することを決めたのだ」。⁽⁵⁸⁾この一文の主語と述語を確認されたい。ここでは、加入資格の停止を決めたのが、欧州人民党やその政治総会ではなくフィデスとなっている。つまりノバクは、二〇一九年

三月二〇日の処分で記された「党役員会とフィデスは（…）加入資格が停止されることに共同で合意する」という文面を独自に解釈した。処分が下されたのは、EUおよび欧州人民党が重んじる価値の侵害があったからではなく、フィデスが受容しがたい方角に欧州人民党が向き始めたがゆえだというのである。このような解釈には無理があらうが、それはフィデスの姿勢を象徴する言説でもあった。

二〇二一年三月三日にオルバンは、欧州議会の欧州人民党会派からフィデスが脱退する旨を会派のベーパー代表に通告した。党会派は、その内規を改正することにより除名の手続きを整えようとしていた。そのような動きに抗議する形での通告であった。同月一八日には、欧州人民党からフィデスが脱退することがその国際部長によつて書簡で通告された。⁵⁹

おわりに

権威主義化が進むハンガリーへのEUの対応は、EU条約によつて付与される権限が十分でなかったために停滞した。本稿では、このような停滞の背景に同国の与党フィデスと欧州人民党の特別な関係があったと論じた。欧州人民党は、自党の勢力がEUにおいて縮小することや、あるいは有力な加入政党がハンガリーに進出する産業界に配慮していることからフィデスの除名を躊躇した。党首であったドールが家族的な雰囲気や党に求めたことも、除名せず加入資格の停止に留めた一因であった。他方において、フィデスを率いるオルバン・ハンガリー首相は、キリスト教民主主義を掲げる欧州人民党への傾倒を強調していた。

フィデスをめぐる欧州人民党の行動は、煮え切らないものであり、常に後手を踏んでいた。フィデスの国内施政は、

二〇一一年から翌二〇一二年の時点ですでに問題視されていた。同党が権利停止を科したのは、ようやく二〇一九年のことである。同党はしかも、オルバンが二〇二一年三月に脱退を決意するまでにフィデスの除名を決定できなかった。欧州人民党の消極的な姿勢と党内の混迷は、ハンガリーにおける民主主義の後退を放置したばかりか、フィデスに脱退に向けた猶予の時間を与えるのみであった。そして、このような惰性が、欧州人民党関係者が多く属するEU機関を迷わせ、対応が停滞する一因となったと考えられる。

フィデスの欧州人民党脱退は、欧州の政治情勢に影響を及ぼしうる。すなわちフィデスは、ポーランドの法と正義に象徴される非自由主義的な民族主義勢力と従来以上に全面的に結束することが予想される。対して欧州議会の欧州人民党会派は、中道左派および自由主義の諸会派との協力をより効率的に進めることになるだろう。⁽⁶⁰⁾これらの変動により、東西欧州間で生じつつある地理的な分断がさらに可視化される可能性が残る。

- (1) Freedom House, *Nations in Transit 2020: Dropping the Democratic Facade*, p.2.
- (2) V-dem Institute, *Autocratization Surges: Resistance Grows: Democracy Report 2020*, p.14.
- (3) 詳細は、山本直『EU共同体のゆくえ』ミネルヴァ書房、二〇一八年、第七章；同「欧州議会の対ハンガリー警戒とEU人権政治―リベラルなヨーロッパの反撃?」『国際人権』国際人権法学会、二〇一九年、第三〇号を参照されたい。
- (4) 二〇一九年以前の双方の関係については、山本直「EU『価値の共同体』とヨーロッパの党派政治」『公益学研究』日本公益学会、第一九巻第一号、二〇一九年を参照されたい。
- (5) “DECISION OF THE EPP POLITICAL ASSEMBLY REGARDING THE EPP MEMBERSHIP OF FIDESZ, 20 March 2019”, <https://www.epp.eu/papers/proposal-of-the-epp-presidency-to-the-political-assembly-regarding-the-epp-march-2019>

membership-of-fidesz/. 二〇一九年三月三〇日閲覧。

(6) 処分に付記される前書きと後書きには、以下必要に応じて触れたい。

(7) STATUTES OF THE EUROPEAN PEOPLE'S PARTY, approved by the EPP Congress on 29 March 2017 in Malta, Article 9.

(8) E.g., “Brussels accuses Orbán of peddling conspiracy theory with Juncker poster”, *Guardian*, 19 February 2019.

(9) “DECISION OF THE EPP POLITICAL ASSEMBLY REGARDING ...”, *op.cit.*

(10) Andreas Rinke, “German conservatives: Let’s suspend Hungarian party from European bloc”, *Reuters*, 20 March 2019. See also, Eszter Zalan, “Juncker: Orbán should leave Europe’s center-right”, *Euroobserver*, 20 February 2019.

(11) Zalan, *op.cit.*

(12) Eszter Zalan, “Centre-right EPP faces showdown with Orbán”, *Euroobserver*, 20 March 2019.

(13) STATUTES OF THE EUROPEAN PEOPLE'S PARTY, *op.cit.*, Article 9.

(14) 欧州人民党規程によると、政治総会における投票権者は(a)職権上の構成員と(b)委任された構成員である。各々以下の者が該当する。

(a) 職権上の構成員

・党役員

・欧州議会会派の役員・正加入政党、准加入政党および提携団体の長またはその代理

・欧州議会会派を構成する国家政党の代表

・正加入政党の所属党員である、欧州議会の幹事組織、欧州委員会および地域委員会の幹事組織の構成員

・正加入政党または准加入政党の所属党員である、欧州審議会議員総会、欧州安全保障協力機構、北大西洋条約機構、地域委員会、地中海同盟およびユーロネストにおける党団体または提携団体の長

(b) 委任された構成員

・ 正加入政党および准加入政党の代表

・ 正加入政党と准加入政党は、その委任を受ける者を任命する。なお、正加入政党の委任者数と投票権は、各党における欧州人民党所属会員数に比例するかたちで配分される。准加入政党の委任者数と投票権は、役員会によって配分される。

STATUTES OF THE EUROPEAN PEOPLE'S PARTY, *op.cit.*, Article 15.

- (15) Zalan, “Centre-right EPP faces ...”, *op.cit.*; Eszter Zalan, “EPP suspends Orbán’s Fidesz party”, *Euroobserver*, 21 March 2019.

- (16) 欧州人民党公式ホームページ (<https://www.epp.eu/parties-and-partners>) より。二〇二〇年四月一日閲覧。

- (17) 欧州人民党の加入政党で最多の欧州議会議員を抱えるのは、ドイツのキリスト教民主／社会同盟であった。次いでフランスの共和党（国民運動連合）、イタリアのフォルツァ・イタリア、スペイン国民党およびポーランド「市民プラットフォーム」の五指である。Ariadna Ripoll Servent, *The European Parliament*, Palgrave, 2018, p.197, Table 9.4.

- (18) See, Stephan Löwenstein and Thomas Gutschker, “Diese Politik beendet das Errinken”, *Frankfurter Allgemeine*, 14.10.2018.

- (19) Isabell Page, “German Investments in Hungary”, *SPOTLIGHTMETAL*, <https://www.spotlightmetal.com/>, 4 April 2019; Edit Inotai and Claudia Ciobanu, “Can Hungary and Germany kiss and make up?” *Balkan Insight*, 9 December 2020; Matthew Karnitschnig, “Angela Merkel’s rule-of-law legacy: A divided Europe”, *Politico*, 18 December 18.

- (20) C.f., Gianna-Carina Grün, Ben Knight, “Wie Firmen deutsche Parteien finanzieren”, *Deutsche Welle*, 22 September 2017.

- (21) See, Karnitschnig, *op.cit.*

- (22) Rinke, *op.cit.*

- (23) Zalan, “EPP suspends ...”, *op.cit.*

- (24) Cécile Barbrière, “Joseph Daul: «Le Gxexit aujourd’hui c’est du 50-50»”, *Euractiv*, 3 juillet 2015.

- (25) “Joseph Daul: ‘Viktor Orbán est l’enfant terrible du Parti populaire européen’”, *France 24*, 26.11.2018.

- (26) フォルツァ・イタリア所属のタヤーニは、欧州議会議長も務めた党内の実力者であり、党の副党首でもあった。そのタヤーニはフィデスの除名に一貫して反対の立場を取ったと報道された。“Tajani accused of protection Orbán”, *European Interest*, 13 September 2018; “Deputy head of EPP calls for keeping Fidesz within the party”, *About Hungary*, 23 December 2019.
- (27) Maïa de La Baume, “Fidesz MEPs remain in the EPP group, for now”, *Politico*, 26 March 2019.
- (28) *Ibid.*
- (29) “Oliver Várhelyi is fit for the job”, Newsroom, EPP Group, <https://www.eppgroup.eu/newsroom/news/oliver-varhelyi-is-fit-for-the-job>, 14 November 2019. 二〇二〇年一〇月二日閲覧。バルヘイは、公式にはフィデスに所属していないがオルバンに近しい人物であると考えられる。Lili Bayer, “Hungary names EU ambassador as new Commission nominee”, *Politico*, 1 October 2019.
- (30) STATUTES OF THE EUROPEAN PEOPLE’S PARTY, *op.cit.* Article 3.
- (31) *Ibid.*, Article 11.
- (32) 顕著な例として、議員団がイギリスの保守党等とともに「欧州人民党—欧州民主」という会派を形成していたことが想起される。ヨーロッパ統合の方向性をめぐり折り合えなかった同国保守党は、欧州人民党に非加入のまま二〇〇九年まで欧州議会内で統一会派を形成した。Richard Corbett, Francis Jacobs and Darren Neville, *The European Parliament*, 9th edition, John Harper, 2016, p.99. *See also*, “Tories leaving Europe’s EPP group”, *BBC News*, 11 March 2009.
- (33) 同国に配分された二一議席中、二〇一四年五月に実施された前回より一議席増の二三議席をフィデスが獲得した。不法移民を争点に掲げたオルバンが選挙戦を優位に進めたとされる。他方、野党のヨッビク、市民連合および社会党は互いに票を奪い合う状況であった。荻野晃「ハンガリーにおける総選挙（二〇一八）と欧州議会選挙（二〇一九）」『法と政治』第七〇巻三号、二〇一九年、一九—二七頁。
- (34) Von Robin Alexander and Boris Kálnoky, “I don’t like the politics of vengeance”, *Die Welt*, 02.03.2019.

- (35) “Viktor Orbán im Gespräch: Mit Trump bin ich im spirituellen Einklang”, *Süddeutsche Zeitung*, 1 Mai 2019.
- (36) “Viktor Orbán: Europa soll das Modell Österreich übernehmen, Europas umstrittenster Regierungschef, Ungarns Premier Viktor Orban, gewährt Einblick in seine Denkwelt”, *Kleine Zeitung*, 5 Mai 2019.
- (37) “I’ll only believe that Mrs.Merkel is leaving when I see it”, *Bild*, 27 May 2019.
- (38) “Viktor Orbán: Europa soll das ...”, *op.cit.*
- (39) 欧州におけるキリスト教民主主義勢力の弱体化については、水島治郎「キリスト教民主主義とは何か」田口晃・土倉莞爾編著『キリスト教民主主義とヨーロッパ政治』木鐸社、二〇一三年、三二―三五頁参照。ただし、欧州人民党の内部でオルバンのいう掘り崩しがあったかはあらためて議論する必要がある。
- (40) “Orban says Salvini is the most important politician in Europe”, *Euractiv*, 2 May 2019. カッコ内は引用者。
- (41) 共依存の概念については以下を参照されたい。信田さよ子『共依存―苦しいけれど、離れられない』朝日新聞出版、二〇一二年；宮本真巳「共依存概念の位置づけをめぐって―臨床社会学の視点から―」『アディクションと家族』日本嗜癮行動学会、第三二巻二号、二〇一七年、一二二―一二七頁；小西真理子「共依存の倫理：親をかばう子どもたち」『現代思想』第四七巻一二号、二〇一九年、一八二―一八九頁；柿澤暁「共依存症問題についての考察」『人間学研究論集』武蔵野大学、第九号、二〇一〇年、四九―六四頁。
- (42) “Letters by President Sassoli to Commission President-elect von der Leyen”, Press Releases, European Parliament, 30 September 2019 (<https://www.europarl.europa.eu/news/en/press-room/20190930IPR62887/letters-by-president-sassoli-to-commission-president-elect-von-der-leyen>). 二〇一〇年四月一八日閲覧。See also, “Romanian, Hungarian Commissioner nominees rejected”, *Euractiv*, 26 September 2019.
- (43) Jennifer Rankin, “Viktor Orban’s choice for EU commissioner faces ‘rough ride’”, *Guardian*, 8 September 2019.
- (44) *Ibid.*
- (45) “Values of the Union -Hungary- Article7(1) TEU Reasoned Proposal -Report on the hearing held by the Council on 16

September 2019”, Council of the European Union, 12345/19, Brussels, 19 September 2019; Lili Bayer, “Hungary clashes with other EU members in rule-of-law hearing”, *Politico*, 10 December 2019. *See also*, Eszter Zalan, “Hungary claims EU ‘witch-hunt’ over rule of law hearing”, *EUobserver*, 18 September 2019.

(46) Zalan, “Hungary claims ...”, *op.cit.*

(47) Bayer, “Hungary clashes with ...”, *op.cit.*

(48) “European Parliament resolution of 16 January 2020 on ongoing hearings under Article 7(1) of the TEU regarding Poland and Hungary (2020/2513 (RSP))”, P9_TA (2020) 0014, 16 January 2020, para 1 and 3.

(49) “Orbán Viktor: Soros a világ első számú oligarchája”, *Híradó*, 17.1.2020, <https://hirado.hu/belfold/belpolitika/cikk/2020/01/17/orban-a-neppart-elarulta-magyarorszagot-a-fidesz-majdnem-kilepett-emiatt>. 二〇二〇年七月一日閲覧。 *See also*, “Orbán: EPP Betrayed Fidesz, We Were an Inch Away from Quitting”, *Hungary Today*, 17 January 2020.

(50) 詳しくは、山本直「ハンガリーの権威主義化とEU—COVID—一九対策期の軌轢」『グローバル・ガバナンス』第七号、二〇二一年、九五—一〇八頁を参照されたい。

(51) Marton Dunai and Krisztina Than, “EU conservatives to extend suspension of Hungary’s Fidesz”, Reuters, 29 January 2020. 翌二月の政治総会では評価委員会の具申を採択した。European People’s Party, “EPP Political Assembly focuses on Foreign Policy”, Brussels, 4 February 2020, <https://www.epp.eu/press-releases>. 二〇二〇年二月一日閲覧。 *See also*, Maia de La Baume Lili Bayer and Jacopo Barigazzi, “EPP prolongs suspension of Hungary’s Fidesz indefinitely”, *Politico*, 3 February 2020.

(52) “Wolfgang Schüssel: Wer massiv dagegen war, war Werner Kogler,” *Presse am Sonntag*, 30.5.2020. *See also*, “Arbeit des EVP-Weisenrats zu Ungarn abgebrochen, Schüssel ist enttäuscht”, *Ungarn heute*, 3.6.2020.

(53) E.g., Peter Temel, “Schüssel als Orbán-Kontrollor: Ziemlich beste Freunde”, *Kurier*, 21.3.2019.

(54) ペテリ・ヘクはシュッセルとファン・ロンパイの中間的な立場でもったと考えられる。Thomas Gutschker, “Wie Orbán die EVP

abbblitzen ließ”, *Frankfurter Allgemeine*, 21 Januar 2020.

(55) Tweet by EPP@EPP, 9 June 2020.

(56) “Deutsch: Tusk Reneged on Agreement Between EPP and Fidesz”, *Hungary Today*, 5 June 2020. カッコ内は引用者による。

(57) Tweet by Katalin Novák@KatalinNovakMP, 11 June 2020.

(58) *Ibid.*

(59) フィデスの衛星政党であるキリスト教民主人民党は、脱退せずに残留した。同党から当選した一名の欧州議会議員は、引き続き党会派の所属員として会派のウェブサイトで紹介されている。 <https://www.eppgroup.eu/about-us/members>. 二〇二一年四月二八日閲覧。

(60) See, Vote Watch Europe, “Impact of EPP-Fidesz divorce to be bigger than expected”, 3 March 2021, <https://www.votewatch.eu/blog/category/news/>. 二〇二一年四月二〇日閲覧。

